九条はらまち

福島県南相馬市原町区
「はらまち九条の会」会報 **No.346**
2020(令和2)年7月10日(金)発行

「原子力緊急事態宣言」は、3.11の原発事故から9年経っても、いまだ発令中です

「新型コロナウイルス緊急事態宣言」は今年4月7日に発令され、5月25日に解除されました。でも、2011年3月11日午後7時3分に発令された「原子力緊急事態宣言」は、今なお解除されてはおらず「緊急事態」のただ中にいます。事故原発はいつまた暴れ出すか、放射性物質は大地を汚し空や海に漂っても、もう私たちは麻痺し、すっかり忘れているのではないか。

知恵と工夫でコロナウイルスなんかに負けない生活を

◆◆全国の「九条の会」のみなさんへ◆◆

輝きが増している憲法9条

全国「九条の会」事務局長　小森陽一

みなさんの日々の活動に心よりの連帯を表明します。

新型コロナウイルス災禍の中で、日本国憲法の重要性が日々明らかになっています。「国は、すべての生活部門について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とする憲法25条のそれぞれの項目は、いずれも現在の焦眉の課題です。とりわけ「公衆衛生の向上」は、第二次感染以後も、最も重要な「国」の責任です。

しかし、安倍晋三政権は『アベノマスク』に象徴される無策を日々さらけ出しています。またこの間「検察庁法改正案」に反対するインターネット上の運動が急速に広がり、今国会での採択を阻みました。外出や営業の自粛を要請する「緊急事態宣言」により、多くの国民の生活と財産が危機にさらされています。こうした中で安倍政権への支持率は急落しました。

世界最大の軍事大国アメリカが、世界最多の感染者と死者を出している現状は、武力に頼み国民の命とくらしをないがしろにする政府の素顔を明確にしました。

憲法9条の輝きが日々増しています。4月に発行したブックレット『安倍改憲のねらいと危険性～改憲発議阻止のために』を活用しながら「安倍9条改憲NO！改憲発議に反対する全国緊急署名」を大きく進めましょう！

2020年6月

会員さんの新聞投書

辺野古基地や新兵器購入はやめるべきだ

不要不急の政策国はやめるべき

南相馬市・佐藤　邦雄（無職　88）

政府は国民に対し、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、不要不急の外出自粛を要請し、三密となる集会などの制限を指示した。国民は協力し、それなりの成果を収めたように感じる。

主権者である国民の一人として要望することがある。国家に今、不要不急な政策がありはしないか―ということだ。例えば、沖縄の辺野古米軍基地建設や弾道ミサイル攻撃に備える新兵器の購入などである。基地の建設は完成の見通しがつかないようだし、敵と思われる国が今すぐ攻撃してくるとは考えられない。

今、国際社会では、新型コロナの世界的大流行を受け、人類史上最悪の事態の一つとして、撲滅に取り組んでいる。国内では、東京五輪の延期、大相撲や高校野球、合唱コンクールなどの中止と苦渋の選択を強いられ、各種公演が休演。休校措置も取られた。

国も全力で取り組むというのであれば、不要不急な政策をやめ、緊急なコロナ禍対策に力を向けてほしい。

▲2020年6月3日『福島民報』

安倍政権の感染対策は成功？

安倍首相は日本のコロナ死者が少ないことを政権の成果のように吹聴しています。でも、対策は後手後手、PCR検査も増加せず、不評の布マスク、医療現場の切迫した状況を放置し、GoToトラベルは最悪、無責任で場当たりの朝令暮改の政策ばかりで呆れてしまいます。

安倍政権は「憲法改定」をいつまた発言し出して、民意無視で強行するかも知れません
引き続き「改憲発議に反対する全国緊急署名」にご協力ください

No.346

NHK連続テレビ小説（朝ドラ）『エール』ブームのなかで

古関裕而氏の軍歌（戦時歌謡）作曲をどう考えるか

3月開始のNHKＴＶ朝ドラ『エール』は、福島市出身の作曲家古関裕而・金子夫妻が主人公で、毎日楽しみにご覧の方も多いようです。

5千曲の多様な作品で国民的大作曲家と評される反面、「露営の歌」など数百の軍歌を作曲して戦争に協力し鼓舞したのではないのか、いや実は庶民のやりきれない心情を表現し励ます歌ではないか。

戦後には一転して、「長崎の鐘」の鎮魂や「鐘の鳴る丘」の希望の歌などを作曲しますが、それらをどう考えたら良いのか。

勿論、『エール』は脚色の多いドラマですが、戦中から終戦、戦後の作曲活動はどう演出されるか、大きな注目点です。

『エール』ブーム・古関裕而氏の関連本がたくさん出版されています

○古関裕而自伝『鐘よ鳴り響け』集英社文庫、￥640＋税

古関氏は、作曲は天才的でも文章やお話は不得手といわれていて、この自伝も出版プロダクションが加筆し、誤りもあるそうです。

○刑部芳則著『古関裕而　流行作曲家と激動の昭和』中公新書

￥880＋税　著者の刑部おさかべ芳則氏は、『エール』の風俗考証を担当している日本大学教授。古関氏についての解説でテレビにも出演し、この本では学者らしく巻末に年譜や出典が詳細に記録されています。

○辻田真佐憲著『古関裕而の昭和史　国民を背負った作曲家』

文春新書、￥950＋税　古関氏の80年の生涯の、人柄、作品、業績を逐一解説していて、読みやすく分かりやすい内容です。

○清水友佳子・嶋田うれ葉・吉田照幸著『エール 上・下』NHK出版

『エール』の放送台本をもとに小説化した2巻。**（下）**は8月に発売。

○齋藤秀隆著『古関裕而物語』歴史春秋社　○同著『福島の音楽』同社　○同著『古関裕而うた物語』歴春ふくしま文庫　齋藤氏は1941年福島市生まれ、高校の元国語科教員。「『暁に祈る』は戦意高揚のマーチではなく厭戦歌です。他の戦時歌謡も別離の悲壮感や望郷の思い、詩を貫く厭戦観で多くの人に支持され歌われた。古関や西条八十の責任や善悪を問う前に、この戦争が軍部の無謀な独走によって引き起こされ、罪なき多くの国民の血が流された責任をこそ問うべきだ。古関も不本意な作曲を無理強いされた犠牲者である」と解説しています。

＜戦時歌謡の作曲について＞

古関裕而氏自身の執筆、発言では

「仕事なのだとわり切って引き受け、時勢の流れにまかせていた」　**（自伝の中での述懐）**

「戦時中、神風特攻隊で出撃する若い兵士からお手紙を頂いたこともあり、今思い起こしても本当に胸が痛みます」**（NHKテレビ『古関裕而ビッグショー』のインタビューに答えて）**

古関裕而氏の長男・正裕さんのお話

「父裕而は、戦時歌謡は国民として当たり前のことで、お国のために役立つのならと仕事をしていた。父の場合、たまたま曲もよく、年齢的にも脂が一番乗っている時期でした。

一部、勇壮な曲もありますが、戦時歌謡のほとんどが短調の曲です。メロディーだけを聴いたら本当に物悲しい曲が多い。父が戦地に行き、実際に現地を見て曲を考えていました。兵隊さんの気持ちになったら、決して勇壮な曲は浮かばなかったのでしょう。

兵隊さんに喜んでエールを送るのではなく、体に気をつけて故郷に残した家族の元に戻ってほしい。戦争に勝つより、生き延びて帰ってほしいという思いがおそらく強い。そういうメッセージを感じます」　**（KFB福島放送のインタビューに答えて・2020年2月21日『朝日新聞』）**